

世界へ「物、事、考え」を伝える 平明日本語について考える(Part-2)

パワーポイントを禁止せよ ほか

目次

- (181) オープン・ジャパニーズ、あるいは平明な文書がなぜ作れない
- (199) 論理的思考、あるいはその表現
- (201) 科学と英語、あるいは理科を英語で
- (219) オープン・ジャパニーズ、あるいは第2母語
- (228) 丘浅次郎、あるいは明治期の文章、明治の人が書いた仕様書
- (237) 心技体、あるいは心知勇
- (256) 漢字、あるいは「感じ」で理解
- (267) 確信犯、あるいは意図してのあいまい文章
- (276) 難解、あるいは難解が故に尊し
- (288) ものをみる目、あるいは文章
- (290) 随筆、あるいはエッセイ
- (297) 日本語文章学習方法: 英語を手本にして
- (317) 音読みと訓読み: 生まれ方が違う
- (318) 主語の有り無し: 日本語の場合
- (387) 日本文化の基底、あるいは美意識
- (390) 和魂洋才、あるいは洋才とは何か
- (398) 論理性、あるいは正しさ
- (404) 歴史、あるいは論理的思考
- (404) 歴史、あるいは論理的思考
- (425) 論理、あるいはその表現
- (478) 北辰一刀流道場: ロジカルであることの利点(1)
- (517) パワーポイントを禁止せよ

(181)オープン・ジャパニーズ、あるいは平明な文書がなぜ作れない

もう四半世紀以上も前から、イギリスとアメリカで続けられている「平明英語」(Plain English) 運動が、分かりにくい文書の最たるものとして槍玉に挙げられているのが、法律家 (lawyer) が作成している裁判の判決文であり、また官僚が作成している官公庁の各種フォーム文書である。

この事を知ったとき、日本社会でも英米社会でも、法律家や官僚というのはどこでも同じなのだと言えやうと笑いを押さえることができなかつた。違うところは、英米社会では、どの様な文書であれ平明に作成しよう、という運動が行われているのに、日本では無頓着に難解文書が放置されたままであるところだ。

もちろん日本のお役所においても、わかりやすく説明しようという努力がなされてきているのは私も承知しているが、残念ながらその結果はまだ合格点をつけるところまではきていない。例えば、税金の確定申告の書類は、昔と比べてわかりやすくはなつたが、やはりまだ私のようなフツターの庶民が読んですいと書き込める状態には程遠い。税金をもれなく集めるという目的があるにすれば、行届かないことおびたしい。

なぜなのだろうか。

わかりやすく記述しようという姿勢はあるのだが、どのように記述すれば良いのかが分からないのだから。誰にとってもわかりやすく書くということは、「お客様」の立場に立ってサービスするという親切心が身についていないと実現はできない。スローガンだけは「お客様は神様です」と壁に貼ってあつても、その心が根付いていなければ、結果としてはやはり「わかっているのは自分だけ」となり、「読んで分からない奴は馬鹿だ」という心が透けて見える。

文書およびそれを構成する文章は、読む人にわかつてもらおうという心が無ければ、結果としては難解なものになる。他者が読んで分からないのは、書き手である自分の責任であると思わず、読む人の能力の問題だと考えている人には、わかりやすい文書は作れない。

平明な文書はまず何よりも、他者に対する「優しい心」が無ければ生み出せない。この心を持たない人が書いた文書は、読んでいて極めて不愉快である。書き手の心と態度は文書に現れるのである。

一読して意味がつかめない文書が横行している理由のまず第一は、親切心が無い「嫌な奴」が書いているから、ということになる。

(06. 6. 20. 篠原泰正)

(199)論理的思考、あるいはその表現

昨日、06年7月15日の朝日新聞に、国立教育政策研究所が実施した調査の結果が発表されたとの記事があった。この調査は、全国の小4から中3の生徒3万7千人を対象として、国語と算数・数学の「特定課題」についておこなわれたとのことである。

その結果は、朝日新聞の要約によると、以下のようなことらしい：

「難点として浮かび上がったのは、論理的に考えたり、筋道立てて考えを表現したりする力。答えは出せても、そこに至る過程を説明できない傾向もあり、研究所は”国数共に、文章をもっと書かせる指導が必要”と指摘している」

子供たちが論理的思考とその表現に弱いことは、驚くべきことでもなく今に始まったことでもない。戦後の教育の全期間を通して、論理的に考えそれを明快に表現する教育はなされてきておらず、その教育結果は、現在の大人たちを眺めればすぐにわかることである。つまり、日本人全体がこの論理思考と表現に弱いわけである。

論理的思考とは、ある一つの事項に関する情報を集め、その情報を分析し、問題点を見つけ出し、その問題を解決する策を考え出すことに他ならない。つまり、自分で情報を集め、自分の頭で考えることに他ならない。

子供たちにこの能力を付けさすためには、少なくとも一つ、その子供が興味を持つ対象あるいは分野を持たすことが必要となる。その子供の得意技、長所を自覚させ、それを発展させるように支援することが必要となる。この支援活動を本来の意味での教育という。

興味も何も無い事項が与えられて、さあ論理的に考えなさいと言われても、やる気がでるわけがない。理科でも社会でも国語でも数学でもスポーツでも、対象は何でもよい。その子が得意とする分野を対象とすれば、自分でせつせと情

報を集め、小さな頭を回転させて問題点を探し、解決策を考え出してくるはずである。頭の良し悪し（本来そのような基準は存在しない）に関係なく、誰もができる「作業」である。

そのことができれば、次は、それを表現するという課題となる。自分が集めた事実を描写し、問題点を示し、改善策を表現する。更に、どの様に進めてきたのか、最初からの過程を表現する。これが論理的表現である。

この60年の日本における小学校、中学校の教育でもっとも誤ってきたことは、「作文」が国語の教科の中でのみ取り扱われてきたことにある。日本語で文章を書くわけだから、それが国語教科の範囲に置かれるのは当然であろうが、作文すべき対象は、音楽から体育まで全教科に置かれるべきであり、それらにおいて、上に述べたような論理的に考え、論理的に表現する指導と訓練が行われていれば、今日、日本でみられるような惨状は防げたであろう。

もちろん、繰り返すようだが、この指導と訓練は、全教科に渡って一律に強制すべきものではなく、こどもたち一人一人の自分の得意分野でのみ指導すべきことである。そうでなければ、全員、学校から逃げだしてしまうだろう。義務教育の期間に自分の得意分野一つだけでこの訓練ができていれば、その後の高等学校や大学では、その他の教科においても、好きでもなく得意でもなくとも、自分の得意分野で培った（つちかった）論理展開と表現は適用できることになる。ひとつを習得すればその他に応用できるわけだから。

思考と表現は表裏一体であり、考えられなければ明快に表現できず、明快に表現できなければ考えがまとまっていない、考える力が無いということになる。

論理的思考とは、簡単にいえば自分の頭で考えるということであり、このことができていないから、この20年の日本の没落がある。欧米に追いつくと、お手本が目の前にあったときはあまり考えることもなく黙って手足を動かしていればそれで済んだ。それが、ある日気がつくとき先頭集団で走っていた。どちらに進めばよいのか自分で考えなければならなくなった。自分で考えて、先頭集団仲間、あるいは後ろの集団に声をかけて、相談しながら方向をまとめていかねばならない立場になった。しかし、自分で論理的に考え、その考えを論理的に表現する訓練を受けてこなかったために、自分にその訓練を課してこなかったために、先頭集団にいながら、何も考えられず、何もしゃべらない、怪しげな存在となっている。

自分の頭で何も考えられないから、この20年、国や企業が取った手段は、ひたすらアメリカ様のご指導に従うものであった。日本では、先生の言うとおりに何でも無批判で従い、黙々と知識だけを詰め込む生徒を「優等生」というらしいが、もちろんそそれらの優等生は、人間の本来的な存在意義からいえば、優等どころか「痴呆生」と称すべき存在といえる。

更に付け加えれば、改善策まで考え出す力はあったとしても、それを実行に移すべく提案する「勇気」に欠けていては、何にもならないということだ。しかし、この「勇気」の話題はここでの扱い事項ではないから、またの機会に譲ろう。

(06. 7. 16. 篠原泰正)

(201) 科学と英語、あるいは理科を英語で

人、人を取り巻く自然環境、人がこしらえ運営している社会、これらの対象について学ぶのに、人は言語を道具としてもちいる。したがって、用いる言語が持つフィルターを通して物事を見、分析し、対策を考えていることになる。何語を使っているかで各人それぞれのズレが生じる。

国語の力が学校で習う全教科に大きく作用するのは、言語をとおして学習しているからであり、同時にそれらの教科、例えば算数とか理科を学ぶことで、国語の力が向上していく。

今はどうなったか知らないが、昔は日本人の算数力は世界一と言われていた。算数・数学に弱い私でさえも、海外で物を買ったりしたときの暗算の速さは、キオスクのおばさんから天才扱いを受けるほどのものだった。考えて見るに、算数で使われる日本語はきわめて合理的でわかりやすくできている。足す、引く、掛ける、割るというやまと言葉の動詞で4則が成り立っているのはありがたい話だ。分数においても3分の2は3つに「分けた」内の2つだから、これもわかりやすい。欧米人が算数に弱い(全般的にいて)のは言語のせいかも知れぬ。インドの人やハンガリーの人が数学に強いのは言語が味方しているのではないだろうか。

さて、英語学習の話であるが、日本の英語学習指導で根本的に誤っているのは、

これを言語として学習させていることにあるのではないか。人が生きていく上で必要な言語、つまり母語と同じ扱いで、英語を言語として学習させることは、基本的に無理である。中学から高校までの英語学習の時間を合計してみるだけで、そんなことは無理であることがわかる。

言語として教えるから、中学生にむけて、米国の文法書にあるとおり、「未来完了形」なんてややこしい表現スタイルまで教えることになる。アホジャナカロカ。

人が生きていく上では、母語さえできれば基本的に OK である。英語ができないから餓死した、という話は聞いたことがない。英語ができなくても食っていけるのだ。それならなぜ英語を学ぶ必要があるのか。

言語は、自分という存在を含めて、世界を眺めるための道具であるということをはじめに記した。したがい、母語以外の外国語を習得することは、母語とは違った角度あるいは色眼鏡で世界を眺めることができるようになることを意味する。政治面から世界を眺める、経済から見る、自然科学から見る、工業技術から見る、等々、一味違う眺め方ができるようになる。

ということで、学校で教える英語は、世界を眺める変わった道具として扱うのがよいのではないかと思う。例えば「理科」は自然科学の分野であり、この分野は文化としての言語の影響を最も受けにくいところだから、いっそ理科を英語で学んでみてはどうだろうか。自然科学のほとんどは欧州から学んだやりかたなのだから、英語で学んでも日本人の「大和魂」に悪い影響はあたえないと思われる。実際、理科や化学は英語で学んだ方がずっとすっきりするのではないか。本家で発達した学問分野だから、そこで使われている言語の方が表現において適性をもっていることは当たり前である。カタカナだらけの教科書で習うよりすっきりするのではないか。

理科の英語なら、「未来完了形」は出てこないし、それどころかほとんどの文章は現在形だから文法の「時制」に悩まされることはない。英語を母語とする人が使う「熟語」などもでてこないから、アメリカ文化、イギリス文化を知らなくとも、まったく問題ない。

英語で表現する力、はどうなるか。答えは簡単で、国語でまともな表現ができるようになるまで、英語で表現するなんておそれたことはやらしてはならな

い。箸も満足に使えないのにナイフとフォークの作法を教えるはいけない。言語としての英語による表現は、母語である日本語でまともに表現できるようになった人からその学習課程に入るべきだろう。

学校の英語授業は、言語として教えるのではなく、世界を眺める道具の一つとして、眺め方の学習の中での道具として扱えるようにするだけでいいのではないだろうか。例えば、英語と理科の時間を合体するとかして。

(06. 7. 20. 篠原泰正)

(219) オープン・ジャパニーズ、あるいは第2母語

どうやらわかってきたが、われわれ日本人は、英語を学習する前に、物事を論理的に記述するために、第2母語としての日本語を学ぶ必要がある。この言語を私は「オープン・ジャパニーズ open Japanese」と呼んでいる。

ロジカル (logical) に物事をつきつめ、それをロジカルに表現する訓練がされていないのに、きわめてロジカルな英語を、さ一勉強しろと迫られても、それは酷というものではございませんか、ということだ。頭の中でロジカルな適応力が育っていないところに、外国の言語を身につけろと迫られることは、二重の苦難を強いられることになる。そのため、結果としては、英語も身につかず、母語である日本語で論理的に表現することもできない「日本人」がごろごろでてくることになる。

英語を学習するときに、なぜそのような表現方法をとるのか、なぜそのような言い方をするのかを、論理的というテーマを抜きにして理解することはほとんど不可能であろう。文化としての英語を学ぶなら、論理云々抜きで学習できるかもしれないが、この種の英語はもちろん一般的ではない。大体、文化に密着した言語なんぞが、簡単に、外国語として学習できるわけがない。

なぜ英語を学習するのが必要かといえば、一つは世界の情報を入手するためであり、一つは事実と当方の考えを世界の人に伝えるための道具として使いこなす必要があるからである。世界の人と相互に事実と知恵を交換する必要がある事項は、自然に関することと社会に関することである。シェクスピア (William Shakespeare) の価値や芭蕉の意義を論じるためではない。したがって、アングロ・サクソンの文化、英国・米国の文化と切り離された、オープン・イングリ

ッシュを学習すればいいことになる。

その「Open English」を学習するためには、その前に、日本語でロジカルに考え、ロジカルに表現する学習（訓練）しておく必要がある。あるいは平行して学習を続ける必要がある。

世界に誇るに足るわれわれの日本語、優美な日本語は、そのままではロジカルな展開には適していない。侘び（わび）・寂び（さび）、粋（いき）と粋（すい）を表現するのに適した言語で、同時に論理的表現にも適していることを求めるのは、” あんさん、いかに何でも無理というものでござんしょ”、ということだ。天は二物を与えず。

では、世界の人々と世界の中の普遍的事項、戦争や飢餓や石油枯渇や地球温暖化や情報通信技術や、何やかやをを伝え合い、知恵を交換するにはどうすればよいのか。日本語は適していないから、はじめから英語でやれというのか。そんなアホな話はない。もっとも、日本人全員が、イギリスとアメリカとオーストラリアとニュージーランドに分散して移住すれば、次世代の日本人からは可能だろう。やりますか？

答えは簡単で、論理的思考と表現に適した日本語を身につければいいことになる。これは母語であるから、誰でも学ぶことができ、容易に身につけることができる。第2母語としての日本語、「Open Japanese」である。日本語でそれが可能か。答えは「可」である。間違いなく実現できる。

英語は論理的だからうらやましい、という馬鹿がいる。英語は論理的である代償に、日本語のような、自然と共に生きながらの情緒、感性を表現することは難しい言語である。天は二物を与えないのだ。

論理思考と表現に適した第2母語日本語で文章を論理的に明確に記述することができれば、作成されたその文書は、英語（だけでなくその他の欧州言語も含め）と「互換性 compatibility」がとれている、つまり世界の中でのドキュメントとして、どこにでも伝わる互換性を持っている存在になる。

もちろん、実際に世界の中で泳ぎ回るには、その文書が英語に訳されている必要があるが、元の文書がロジカルに明快に日本語で書かれていれば、それを正確に英語に転換してくれる英語の達人はたくさんいるし、機械翻訳でも相当レ

ベルまでやってくれるだろう。

(機械翻訳の出来具合が悪いと文句をつける人がいるが、奥の細道や円朝の落語を翻訳にかけて、まともな英語にしてくれないと怒っても、それは無理でござんす)

それでは、この第2母語日本語、すなわちオープンジャパニーズの構築はできるだろうか。たいした労力は要らないのではないか。必要性を理解しており(今現在)、日本語が大好きで、英語にも強い人が10人も集まって知恵を出せば第2母語仕様書が作れるだろう。

(06. 8. 10. 篠原泰正)

(228) 丘浅次郎、あるいは明治期の文章、明治の人が書いた仕様書

司馬遼太郎さんの「この国のかたち」第6巻に言語についての感想という小論がある。その中で興味深い人物が出てくる。丘浅次郎という明治初年に生まれた生物学者がそれである。私は浅学ゆえにこの人のことはまったく知らないが、司馬さんによれば、彼は作文で大学予備門で落第したのだそうだ。

しかし、「丘の文章は、地理の教科書のように事物を明晰にとり出し、叙述も平易である。たとえば「善と悪」(大正14年)という高度な倫理学的主題について生物学の立場から展開した文章などは、述べかたが犀利(さいり)で、論旨が明快なだけでなく、. . . 」

丘さんの「落第と退校」(大正15年)という文章から、司馬さんの引用を孫引きすると、「私の考えによれば、作文とは自分の言いたいと思うことを、読む人にわからせるような文章を作る術であるが、私が予備門にいたころの作文はそのようなものではなかった。むしろなるべく多数の人にわからぬような文章を作る術であった。」

丘さんが、自分の言いたいことを他人にもわかってもらうように作文したおかげで落第させられてから、120年以上の年月が流れているが、今の世にもまだ「なるべく多くの人にわからないように書く」ことが霞が関やその下部機関に横行していることを彼が知ったら、それこそ仰天するのではないか。

あるいは福沢諭吉のように、自分の文章は猿にさえ読めるように書く、といっ

ていた人からみれば、自分があれほど熱心に進めてきた「学問のすすめ」が結局一部の人々には馬の耳に念仏であったかと、嘆くことになりはしないか。

丘さんや福沢さんに、現在の国内の「特許明細書」を見せれば、自分たちがあれほど努力してきたことが生かされていないことを知り、うつ病にでもなってしまうかもしれない。

一つの社会のなかで、明晰な文章と論理的に明快に組み立てられた文書がどのレベルまで流通しているかによって、その社会の「文明」の度合いが測られるとすれば、日本は未だに明治初年のレベルを脱していないのではないかと思いたくなる。

西洋においては、論理的に明快に文章を書けることがエリートの基本条件となっている。日本においては、なるべく読む人がわからないように書くことが、エリートの証（あかし）となっているらしい。おかしな社会ではある。（06.8.17. 篠原泰正）

(237) 心技体、あるいは心知勇

スポーツの世界で当たり前のように言われる「心技体」は、なにもスポーツの世界に限ったことではなく、この世で生きていく上での必要三要素であるとも言える。例えば、会社勤めを見てみると、そこでもやはり強い精神力と、仕事を遂行できる技（知識、技術、処理能力などなど）と、そして継続できる体力が要求される。

明快な文書を作る、というのは私が抱えている大きなテーマであるが、ここでも「心技体」に似た三要素が必須であることに最近気がついた。

明快な文書を作り出すためには、まず何よりも、その文書の受け手（読む人）への配慮（気配り）が必要であり、その「心」に欠けている人は明快な文書を生み出すことはできない。あるいは、わざとわかりにくい文書を作成する。他者に対する思いやりの心が不足している人には明快文書作成は縁遠いものとなる。

さらに、明快文書を作り出すためには、当然であるが、頭の中が論理的に整理

されており、その展開を明確な文章で表現できる力が必要である。どのような難しい理論の説明であっても、わかりやすく記述することは可能であり、それができない人は頭の中が整理されていないと評価されても仕方がないだろう。

明快文書を作成するための三番目の要素としては、特に日本人にとってこれが一番の課題であると思われるのだが、物事をはっきり言い切る「勇気」が挙げられる。言い切るには勇気が要る。特に、その言い切った結果の責任を取る覚悟が要る。この勇気を持たない人は、いくら頭が良くても明快な文書は作成できない。

このように、明快文書を作り出し、それを公にするうえで、「心技体」ならぬ「心知勇」の三要素が必須の事項としてあげることができると、この1年ぐらいのあいだに私は結論付けるようになった。

日本人には二つの人種があって、ひとつはお公家集団に属する人で、もうひとつは武門の人である。

お公家集団の際立った特徴のひとつは、自分および自分達集団の利益のみを常日頃考えており、国や、地方自治体や企業といった、自分達がその中に属する全体組織は、ひたすらに自分達の利益に奉仕する仕掛けあるいはシステムであるに過ぎない、とみなしている生き方にある。したがって、その全体組織の構成要員は自分達に奉仕する存在にすぎず、その存在への配慮などは心の中のどこにも存在しない。

もうひとつの際立った特徴は、徹底的に責任を取らない、というところに見られる。何事か、どじっても、徹底的に逃げまくるわけだ。従い、生じた事実を分析し、反省し、次の改善を考え提示するという作業は絶対に行わない。

この二つの特徴からだけ見ても、先に述べた明快文書作成のための三要素の二つが欠けていることが明白であり、したがって、お公家集団は決して「明快文書」は提出しないという事実となって現れることになる。

これに反して、もうひとつの人種である武門の人、すなわち武人集団は、例えば昔のまともな戦国大名を思い出せばわかるように、自分および領民の生存を常に心がけており、生き延びる技に長けており、そして自分の決断およびその結果に対して責任を取る覚悟が常にある。「心技勇」が欠けていては武人では

ありえない。

以上のことから、ここでの結論を単純に引き出せば、明快な文書は「武人」でなければ作れないということ、お公家集団には、どう逆立ちしてもそのことは期待できない、ということになる。

心情において武門の人である人々の数が増えない限り、世界が今直面している大難の中で日本が生き延びることは難しく、ましてや世界のパスファインダーとしての使命を果たせるわけがなく、そのために必要な「明快文書」も生まれてこないことになる。

自分が作り上げ提出した文書は、自分の名誉にかけて、すなわち「名こそ惜しけれ」の美学の下に、責任を持つ気構えがある人だけが、明快な文書を作り出すことができる。そのような気構えのない人、すなわちお公家集団に属する人に、いくら「文書は明快に作りましょう」と呼びかけても、もともとそのような美学を持ち合わせていないし、自分の不利益になりかねない行動あるいは方法に賛同するわけではない。

話はすこし飛ぶが、ものを作って世の中に出すということも勇気が要る業である。例えば品質に問題がでれば責任を取らなければならない。当たり前のことだが。したがって、ものづくりは武門の人のみが担当できる業である。そこから、ものづくりの基盤にある「発明」においても、武人である技術者が、己が責任の下に「発明仕様書」を書き上げることが望ましいということになる。それによってのみ、明快な「特許仕様書」が出来上がる道がある。（06. 9. 03. 篠原泰正）

(256) 漢字、あるいは「感じ」で理解

漢字は言うまでもなく、言語を表記する記号であると同時に一つの文字自体が意味を表現している。西洋のアルファベットは単に記号であり、意味を伝えるにはその記号をいくつか組み合わせる必要がある。その記号の集まりが何を意味しているのかは、定義を確認しないと理解できない。一方、漢字で表現された単語は、文字そのものが意味をもっているため、定義をしなくとも、「なんとなく感じ」で理解される。あるいは発信者は「理解されるもの」と暗黙の期待の下に表現している。

日本国民の識字率が近代以前から高かった一つの要因に、この、漢字さえ知っていれば、なんとなくおおよそ理解できるという事実を挙げることができるだろう。これに比べて、西洋の言語は単語一つ一つの意味を覚えこんでいかなければならないから、大いなる学習努力が必要となる。このことは、同時に、伝えたいことを正確に伝えるためには、一つ一つの単語をどのように扱わなければならないか、大いに神経を使うことになるだろう。また、自分が使用した単語の意味はこれこれであるという定義付けも怠れない。

特許仕様書から新聞記事まで、企業内の報告書から官庁の通達文書まで、あらゆるところであいまいな日本語文章が溢れている一つの原因は、このなんとなく「感じ」で分る「漢字」を使用しているところにある。文章を書いている人は、「なんとなく」、読み手がわかってくれるだろうとの甘えに基づいて明確な表現を怠り、読む人は、「なんとなく」わかったつもりになって満足している。このような相互関係の下では、あいまいさが厳しく指摘されることはない。

8月31日付けの朝日新聞13面に「新戦略を求めて—第3章グローバル化と日本」という特集記事が全面に載せられている。そのリード部分：「.日本には、環境を守る知識、技術が蓄積されている。それは、苦い体験を糧に獲得した日本の「資産」である。途上国にもっと移転し、地球規模で公害防止、持続可能な発展に役立てる戦略が必要だ。」

この最後の文章は構造として不備でまた意味も不明確である。「その資産を途上国に.」というように、何を移転するのか目的語をこの文章の中にも入れるべきである。日本人であれば、読む人は移転されるべきものが何かは「推測」できるが、読む人の推測に頼る表現は正確な文章とは言えない。更に「戦略」を誰が立て誰が実行すべきであるかについて記述されていない。読者一人一人に対して、あなたはその「戦略」を持つことが必要だと述べているのか、自分達朝日新聞が考え出すべきなのか、大手企業がもつべきなのか、それとも政府にむかって述べているのか。結果として、この文章はきわめて無責任な記述となっている。「戦略が必要だ」と投げ出すことで、この先どうなろうとも私は知らないという、あるいは自ら手を汚すつもりのない、（本人は意図していないだろうが）卑怯な人達を書いた文章となっている。

更にこのリード部に引き続いて、論理的概念の混乱もある。

「日本の課題」として3項目挙げられているが、その先頭項目で次のように書

かれている：「公害先進国だった日本には、急成長する開発途上国での環境破壊防止に応用できるノウハウがたくさんある。」この文章は「事実」を述べたもので「課題」ではない。「課題」とは事実から出てきた、何らかの行動を必要とする事項のことであり、ここで課題としていうのならば、ノウハウがたくさんあるから（事実）、「そのノウハウを何らかの手段で世界に伝えること」が課題となる。事実の記述と課題の記述がごっちゃになるようでは、この新聞の知性レベルも怪しいと思いたくなる。

更に、「中国支援」と題されている部の冒頭には次の文章がある：

「環境問題への影響が大きいのは、資源を大量消費し、公害対策も遅れている中国の動向だ。」

「環境問題」とは何か。環境を破壊しているという問題である。したがって、この文章は、「問題」への影響が大きい、事ではなく、「環境」への影響が大きいのは、と書くべきである。

また、「資源の大量消費」と「公害対策の遅れ」は同列で扱える事項ではない。資源を大量に消費しているのは日本をはじめ先進諸国共通の事実であり、環境への悪影響ということであれば、中国を名指しして論じる項目ではない。ここでの記述で意図されていることは、「資源を大量に消費しているのにその結果発生する公害対策が遅れている中国の動きは、地球環境への影響が極めて大きいと懸念されている」ということになる。

「環境問題」という言葉のメインは「問題」であり、「環境」はその「問題」の種類を特定化している修飾語である。だから、上に挙げた記事は「問題への影響が大きい」という意味になる。そうすると、問題への影響とは何のことかということになる。「問題」とは、事実から誰かが取り上げた概念事項である。したがって、ここでの記述の混乱の元は「環境問題」というあたかも一つの単語のように扱われている二文字漢語の安易な連結にあることがわかる。

「環境を破壊しているという問題」と書くべき事項である。そのように記せば、「問題に影響を与える」という表現がおかしいことが見えてくるだろう。「問題」に対しては、悪化させるか、改善するか、解消するかといった具体的アクションが続くべきであり、「影響が大きい」という表現がいかにあいまいであるかが、理解されるであろう。

新聞をちらりと眺めるだけで、ここに挙げたような「はてね？」が幾つでも

てくることからみても、あいまいな日本語文章が世に溢れていることが簡単に誰にでも推測できるだろう。

日本語文章は漢語を勝手に並べて、それぞれの文字が持っている意味を「図形的」に表現して読み手の理解を得ようとしている場合が多い。したがって、文章内の組み立ては極めてずさんに行われる。西洋の言語を母語とする人は、伝えたいことを正確に表すには、単語をどのように配置するかには神経を使っている。日本語文章はいわば「図形・視覚型」文章であり、英語などの西洋言語は「舌の言葉」の文章といえるのではないか。視覚に訴えることができない文章は、論理的な流れを重視して、滑らかに聞き手（読み手）の頭の中に入って行くように、配列を練らなければならないわけだ。（06. 10. 13. 篠原泰正）

(267) 確信犯、あるいは意図してのあいまい文章

「私の言いたいことをお察し願います」という甘えの下に文章を書く発信側と、「およそのところはわかりました。御機嫌よう。」と受ける「超寛大」（あるいはお人よし）の受信者の関係から生まれ、日々大手を振って世の中を横行しているところの、あいまいな日本語文章。

この事実をうまく利用している輩が、昔からこの世に存在している。その一群は、主に官公庁、大手企業にみられる。彼らは、あいまいに表現することで責任元をあいまいにする。あいまいな表現でも受け入れられる日本社会の慣習をうまく利用して、自分達の保身を図るわけだ。

もっと悪質な一群もいる。あいまいに表現して、「だます」者達である。例えば、理解できない条項を並べた契約書で合意を取り付け、いざと言う時は、そのような契約はなされていないと逃げる手を使う。保険の契約書などは要注意である。

更に、何が書いてあるのかわからない文章を書くことで自分達の権威を維持しようとする一群もいる。「さすが先生、アタシ等無学の者にはまったくわからない難しい文章をお書きなさる。えらいものですなー」なんてことで、感心してくれる人は、昔はいざ知らず、いまどきいるとは思えないのに、相変わらず、何が書いてあるかわからないように書くのが自分がエライ証拠、と思い込んで

いる人がいる。滑稽というかアホというか、なんとも形容に困るお人達である。

これらの、意図してわけのわからない文章を作成している人たちだけがおかしいのではなく、およそわかったつもりで受信してしまう受け手側も大いに問題がある。寛大な心も結構だが、鴨がねぎ背負ったようにだまされるのは情けないことである。

自分が読んでわからない文章に出会ったら、何が書いてあるのかわかりません、とはっきり突き返すべきで、決して内容を広い心で「察して」はいけない。

” イヤー、さすがに特許明細書は難しいですな。何が発明なのかさっぱりわかりません。” ” そりゃそうですよ、何しろ特許明細書は技術文書と法律文書の混合ですから、（素人にわかるわけがないのだ、この馬鹿）、そりゃあなたには難しいでしょう”、と騙されたりする。長屋のご隠居風に重々しく諭されたりすると、とかく大工の熊さんや、八百屋のハチ公なんて素朴な庶民はころりといいくるめられてしまうわけだ。

受け取り手が、わからん文章はわからんと突き返さない限り、この世から「怪奇文書」が消えることはないだろう。

（06．10．26．篠原泰正）

（276）難解、あるいは難解が故に尊し

半世紀ぶりに夏目漱石の「吾輩は猫である」を読んでいる。中学生のがき時代に読んだ時も笑ったが、歳とって読むとさすがに滑稽の奥に潜む漱石の詠嘆が読み取れる。なんて難しい感想は脇に置いておいて、にたにたしながら読んでいると、次のような箇所に出くわした。

わけのわからない手紙を受け取って、猫の主人の苦沙弥（くしゃみ）先生がやたら感心する場面である。

「” なかなか意味深長だ。何でもよほど哲理を研究した人に違いない。天晴れな見識だ” と大変賞賛した。この一言でも主人の愚なところはよく分るが、翻って考えて見ると 聊か（いささか）尤も（もつとも）な点もある。主人は何に寄らず わからぬものをありがたがる癖を有している。これはあながち主人

に限った事でもなかろう。分らぬ所には 馬鹿に出来ないものが潜伏して、測るべからざる辺には 何だか気高い心持が起こるものだ。それだから俗人はわからぬ事をわかったように吹聴するにもかかわらず、学者は わかった事をわからぬように講釈する。大学の講義でも わからん事を喋舌る（しゃべる）人は評判がよくって わかる事を説明する者は人望がないのでもよく知れる。主人がこの手紙に敬服したのも 意義が明瞭であるからではない。その主旨が那邊（なへん）に存するか殆んど（ほとんど）捕らえがたいからである。」

この名作は百年前に書かれたものだが、これを見ると「分らない文章をありがたがる」性癖は、世間一般において、いまだに受け継がれているようだ。苦沙弥先生が今に生きていて、毎年40万件制作されている特許明細書の一つを読めば、”これは素晴らしい発明に違いない。これを書いた人は学識がよほど優れている。これぞまさしく知的財産だ、本物のインテレクチュアル・プロパチーだ”、と感心してくれるだろう。

（06. 11. 10. 篠原泰正）

(288)ものをみる目、あるいは文章

今から15年ほど前に出た司馬遼太郎さんの対談集「東と西」は、読むたびに何かを教えられる貴重な本である。

その中に、京都大学のフランス文学の大先生桑原武雄教授との対談がある。「物をその物として見る精神」と小見出しがつけられた話の中で、日本人は物そのものをリアルに記述する習慣がなかったという話から、桑原先生の言：

「ことにイギリス人というのは、物があると、その物はずまらんとか、これは本当の实在だろうかとか、宗教的というか哲学的なことあまり考えないのです。ここにテーブルがあったら、これは大きなテーブルだ、そこへ白い無地のテーブルクロスがのってるとか、そういうことを精密に書いていくわけでしょう。」

発明した事実を正確に記述するなんてことは、われわれはどう逆立ちしても、彼らアングロ・サクソンには勝てないか？

続いて、「日本人も、これはテーブルだということはわかるんです。けれども二メートル余りのテーブルだとか、そういうふうには書かない。部屋へ入ったらテーブルクロスをかけた食卓があって、そこへわれわれはゆったりと対座した

ということで終了です。」

風景の中に自分も入り込んでしまうわけだ。だから、ゆったりと座った、ということが記述のポイントとなる。

続いて、「つまりこちらは（*日本人は）景色でも建物でもそれにふれて感情を動かすでしょう、ちょっとオーバーな言い方をすれば、それへの詠嘆、いつもそれが書いてあるんです。」

対象物を自己と対立する客体として、冷静に眺めて描写することができる西洋人。それに比べると、われわれはなんせ自然の中に入り込んで、溶け込んでしまう「共生」の心の持ち主だから、対象物と触れ合った自分の心の動きが大事であり、対象物がどのようなものであったか、その事実の描写などは念頭にないわけだ。

さらに、途中をおいて、先生は続ける：「中国人でも、日本人と違うところがあります。正確に書いている感じがする。陳寿の「三国志」を見ても、簡潔だけど、ちゃんと書いてある。」

「日本の場合は、桜なら桜という物そのものよりも、自分が桜の花を美しいと思ったという、その桜と自分との関係とか感慨を書く。後世の人が自分の文章を読んでくれたら、いつ、京都のなんとかいう寺に桜があったということがわかるよりも、そのときに、なんとか麻呂という敏感なやつがいて、桜が散るのを見てこういう歌を作ったということだけを知って欲しいのです。」

われわれはやはり知的財産なんてもので、欧米や中国と張り合うことは止めておいた方がよさそうである。自分の発明した事実を厳密に描写し、他と違う事実を並べたてて自分の領域をはっきりと宣言するなんて芸当は、われわれにはできそうではない。

日本人のこの癖（美点でもある）は、知的財産（文書で表現する）という土俵の上では弱点となる。このことを自覚しないで、「知的財産で立国」なんて唱える人は、よほどおめでたいひとである。長所短所の事実の認識がなければ、対策も考えない。分けも分らず、隣がやっているから自分もと、わっせわっせと特許を出願するから、国中合わせて毎年40万件なんて、途方もない数に積みあがる。われわれは事実を述べるのが下手だ、と言う自覚もなしに「量産」するから、40万件の大半は、多分目も当てられない文章で埋まっているだろう。

昔の人のように、その中にせめて歌の一首でも記載されていればまだ価値はあるだろうけれど。何しろ、数が多ければそれで「知的財産」の大手とされている人もいようだから、手をつけられない。話が逸れてしまった。(06.12.12. 篠原泰正)

(290) 随筆、あるいはエッセイ

随筆とエッセイとは別物らしいと気がついたのは、鈍な話であるが、最近のことである。

日本の随筆という形態は、どうやら世界にはないらしい。われわれ日本人が書く随筆は、枕草子の清少納言以来変わることなく、自然やら何やらの対象物と自分との交流を描くものらしい。「春はあけぼの」(が良い)ということだ。

このように、対象物との魂の交感を描写するのが随筆というものであれば、これは日本人の表現形式のもっとも基礎に位置づけられる。慶応のラグビーは「魂のタックル」といわれているが、われら日本人は、自然や他者(対象物)と魂を投げ合って、一心同体となって生きてきた。

昔、江戸の愛宕神社の石段を、馬で上り下りした馬術の名人間垣平九郎は、「人馬一体、鞍上(あんじょう)人なく、鞍下(あなか)馬なし」と褒め称えられた。もしかしたら、この姿が、他者と交流する日本人の極意なのではなかろうかとも思える。

一方、エッセイは、よくわからないが、対象物を客観的に眺め分析した「小品」という位置づけなのではなかろうか。「小品」とは、全体の論理体系を構築した建造物の一部と言うことではなく、それ自体は全体の中の脈絡からは独立した、自由な存在を意味する。まあ、言ってみれば、世界を眺める自由な小窓といったものか。

われら日本人が言語で表現する上での得意技を随筆とするなら、事実を客観的に観察し、できうる限り正確に伝える「文書」作成を苦手としていることは、至極当たり前のこととして理解できる。

一つの実事を言語で記述するのは、絵を描くことと基本は変わらない。つまり、

全体の構図を定めて、ラフにスケッチしてから細部を描いていく。絵の描き方の基本は、小学校・中学校の図画工作・美術の時間で誰でも習ってきたはずだ。だから、大枠から細部に筆（クレヨン）をすすめる手順は誰もが理解しているところだろう。

それに反して、言語で事実をスケッチするやり方を教える教科は、小学校から大学に至るまでの全教育課程で存在しない。

われわれは、自然物などの事実を言語で描写するとなると、どうしても自分の心が入り込んでの「枕草子」になりがちだから、むしろ、その手法は「絵画作成」に基本を置いたほうがよいのではなかろうかと、最近考えている。

日本の特許明細書でしばしばお目にかかる、いきなり発明を取り巻く直接の細部から話を始める書き方は、絵の描き方を思い浮かべれば、いかに「変なやりかた」かが理解されるだろう。” 太郎君、絵というものはね、いきなりちいさな部分から描くのではなく、全体の構図を決めて、その中に含まれるおおきな部分を大雑把に配置し（鉛筆でざっと描く）、それから部分を描くようにするのですよ” とやさしい先生が教えてくれたことを忘れてしまうと、いきなり細部から、いきなりクレームから書き始めたりすることになる。

ピカソの絵をわれわれ素人が理解するのは並たいていではないが、彼はデッサンの達人でもあったから、まともに全体を描くことはできたわけだ。そのことを知らずに、うわべだけ天才の真似をして、目と目があさっての方向に向いて飛び離れているような絵を描いてもらっては困る。ピカソの絵を前にしてうなるのはやむを得ないが、デフォルメされた特許明細書を前にしてうなることはしたくない。

(06. 12. 28. 篠原泰正)

(297) 日本語文章学習方法:英語を手本にして

日本の知恵を世界に伝えるためには、われわれの母語であるオリジナル日本語の表現方法は適さない。もう一つ、別の日本語を作りあげていくしかない、と1年ほど前に思い至った。

その日本語を、とりあえず「オープン日本語」と呼ぶことにしている。われわ

れとは文化を異にする世界の人々に語りかけるための日本語のことである。また、英語を先頭にしての世界の主要言語に無理なく転換できる日本語、すなわちそれらの言語と互換性のとれた日本語という意味も含んでいる。

日本語、と呼んで来たが、頭にあるのは「日本語文章」のことである。

どのようにして、オープンな日本語文章で書けばいいのだろうか。私がやろうとしている学習方法は極めて単純である。英語で記述されている物・事・考えと同じ内容を日本語文章で明快に書けるように訓練すればいいというものだ。くやしいが、技術などの世界普遍事項（共通事項）を論理的に明快に書き表すことにおいては、英語の方が、オリジナル日本語（日本文化に深く根ざした日本語）よりも格段に適しており、また整備されている。だから、まねするのが一番手っ取り早い、というわけだ。

私の手元に、「論文の書き方」（澤田昭夫著、講談社学術文庫）という本がある。その「はしがき」に澤田教授が次のように書いている：

「・・・われわれが自分の考えをまとめて有効に表現するという訓練を日本語でも受けていない・・・」、「工学・技術関係の論文翻訳をしておられる電気通信協会の平野氏によると、同氏のもとに提出される和文論文のなかでそのまま英訳できるのは5パーセントにも及ばず、その理由はそもそも和文の原文がまともに書かれていないことにあるそうです。」

この本は1977年、いまからちょうど30年前に書かれているのだが、どうも事態はいっこうに改善されていないと思われる。改善されていれば、私のごとき存在が、いまさら、「論理的に明快な日本語文章を書こうよ」なんて事を叫ぶ必要はさらさらないわけだ。

澤田先生の努力も一般的には実らなかったようだ。版だけは重ねて、私の手元のそれは55版を示しているから、多くの読者、つまりなんとかせにやという「需要」は続いているのだろうけれど。

この本が、あるいはこの後もいくつか紹介していく類似の書き方教科書が大きな改善の波を起こせなかったのは、なる程教えられていることは至極もったものなのだが、それでは実際にどう書けばよいか、訓練の仕方が示されていないことにあるのではないかと、読みながら私は考えている。

頭でいくら、そのとおりだ、「論理的に明快に書かねばならない」と承知していても、実際にどうすればいいのか分らない。当然である。そう簡単に身につく技ではないから。訓練を続けなければ身につかない。たくさんの実践を積み重ねないと、自分で欠陥が見つからない。その訓練を英語を手本にして行おうとするのが私の提案する方法である。もちろん、英語の文章にも「おっさん、何が言いたいんじゃ？」と首を傾げたくなるものも多いから、特にその道の大先生の本などに多いから、すっきりしたやつを手本に選ぶ必要がある。

ともあれ、英語文章を手本にすることは、英語文章の読解の勉強にもなるし、英語で表現（会議などで）する訓練にもなるので、一石三鳥ぐらいの効率の良さがある。

一つの物・事・考えを英語と同じように、日本語でも正確に明快に表現できる、と私は確信している。日本語文章の「改善」は可能なのだ。その気になって取り組めば、誰もが達成できる「わざ」なのだ。

日本には、これからの世界が必要としている数多くの知的資産がある。それらを明快に表現できなければ、せつかくの宝もうずもれたままに終わってしまう。その宝を世界に提供するためには、一人一人が各人の職場で、立場で文章表現改善に取り組んでもらうしかない。その努力に対して有効な材料を私は提供し続けるつもりである。

(07. 01. 08. 篠原泰正)

(317) 音読みと訓読み:生まれ方が違う

小学生になると、国語（日本語）には「音読み」と「訓読み」があると教えられた。これは今でもそのように日本中の学校で教えられているのだろう。

この分類は大きな誤りであり、それが色々な混乱を招いている。

「音読み」とは中国から単語と文字とその発音をセットで輸入した言葉に当てはめられるものである。ここまでの私の文章でも、国語、学校、分類、混乱、輸入などがこれに当たる。もちろん、輸入しただけでなく、日本で合成して作り出した言葉も多いが方式は同じである。

一方、「訓読み」とは中国から漢字が輸入される前にすでに存在した原日本語（ヤマト言葉と言い換えても良い）の言葉に、輸入した漢字を当てはめたものである。赤い色を原日本語では「あか」と名づけ発音していた。その意味するところは漢字では「赤」という文字に当てはまると知ったので「あか」を「赤」と書くことが付け加わった。ものや時間がA点からB点に移動することは、原日本語ではすべて「うつる」でまかっていた。そこに中国から文字と概念がセットで入り、同じ「うつる」でも、物体や時間が移動する場合は「移る」、鏡などに画像がうつる場合は「映る」、A書から文章をうつすときには「写す」、都を換えるときには「遷す」という文字を当てはめるべきであると理解した。これが「訓読み」である。

このことで分るように、二つの「読み」はまったく別の概念に属することであり、同列に扱うべきものではない。

さらに訓読みにはもうひとつあり、これは原日本語の単語の発音に似た発音を持つ漢字を当てはめたものである。「しなの」の国に「信濃」という字をあて、「むさし」に「武蔵」をあてはめたのがその例である。「むさし」の場合は「武蔵」で落ち着く前にはいろいろな漢字が当てはめられていたことが文献でわかる。このやり方は、明治維新以降にも踏襲されて、アメリカが「亜米利加」と書かれたりしたが、今は流行らないやり方になったようだ。

「江戸」という地名の由来は入り江があった場所とかなんとか、いろいろ研究されているようだが、これは「えど」という地名がもともとあり、それは多分えぞ人（アイヌ？）の言葉であったと私は考えている。この「えど」に、後になって似た発音を持つ「江戸」という漢字を当てはめただけだから、漢字の持つ意味から地名を考察しても的外れになるだけだろう。

関東では、「谷」のことは古くは「ヤト」または「ヤツ」と呼ばれており、これは明らかにえぞ人の言葉である。意味するところから「谷」という字が後に当てはめられたので、関東では四ツ谷（よつや）市ヶ谷（いちがや）などなど、谷のある地名は「や」とよばれてきた。小田急沿線にある「谷津遊園」のやつもその漢字当てはめの一例であろう。なお、関西では「谷」はヤマト言葉の「たに」と呼ばれるのが普通である。また音読みでは「谷」は「コク」であるから、「や」という発音は中国でもヤマトでもなく、えぞ式ということになる。（学校では音読み的一种とされているが）。

話はいささか逸れて（それで）しまったが、ここで言いたいことは、音読みと訓読みは、異なる概念あるいは由来に基づくものであり、「読み」という言い方で同列に扱ってはならないということである。

別物だと認識するところから、原日本語と中国から輸入された、およびその方式で日本で合成した単語の違いが常に意識されるようになり、言葉の使い方に注意するようになる。このことを学校で教えないために日本語への理解が日本人の中で育たないことになる。

「教える」と「育む（はぐくむ）」はヤマト言葉である。明治維新のあと欧米から「education(英語)」と言う単語がもたらされたときに、誰かがこれは「教え育むことだ」と理解して、「教育」という単語を作り出した（造語という）。これは大きな誤解であり、「education」の元のラテン語およびそれを借用した英語他諸語では、「子供の能力や才能を引き出す」という意味である。したがって、教師とは「教え育む」役割を持った人ではなく、才能を引っ張り出す支援をする人ということだ。日本の「教育」はその最初から、言葉の意味の誤解と当てはめた漢字の誤用でつまづいてしまったことになる。

漢字は文字が意味をもっており、その意味をおよそ理解していれば、知らない言葉に出会っても、「なんとなく、だいたい、およそ」分ったつもりになれる。「教育」という単語に出会えば、誰もがだいたい意味がわかったつもりになり、それ以上この言葉の意味を追求することはない。150年、この「教育」に誰も異議申し立てすることなく過ぎてきたことになる。

このように漢語は便利ではあるが、一面で、発信する方も受信する方も互いに分ったつもりになる、極めて危険な言葉でもある。

日本語は、原日本語の中に「音読み」の単語を限りなく多く取り入れた言語であり、その単語の多くは「名詞」として扱われている。特に書き言葉（文章語）では、日本語は「名詞」主体で理解を求める言語といえよう。一方、英語やスペイン語などの欧州言語では、「動詞」が文章の中央処理を行っている「動詞」主体の言語といえる。（動詞だけを対象にした英和辞典があるとたすかるのだが）。

「風林火山」は武田軍の「進軍」の様を形容した言葉であるが、この言葉の順序は「進める軍を」となる。「軍を進める」という日本語の順序ではない。つ

まり動詞から目的語という英語と同じ順序である中国語のまま輸入したからこうなってしまう。つまり、「進軍」という名詞にして日本語の中に収めてしまったわけだ。そのようにするしか方法がないとも言える。従い、これを動詞にすると風のごとく早く「進軍する」、となる。ヤマト言葉に置き換えると、「軍を進める・する」と二重の動詞が置かれることになる。なんでもかんでも「名詞」にするしか処理の仕様がなかったのであろう。

ともあれ、原日本語（訓読みの世界）に漢語（音読みの世界）をつぎ足したのが現在の日本語であることを忘れていたので、あいまいな、互いにわかったつもりの言葉が社会のなかであふれている姿となる。

（07.02.12. 篠原泰正）

（318）主語の有り無し:日本語の場合

”日本語には元々「主語」なんてものはない。主語を置け、と学校で教育することは、欧米の言語にかぶれた馬鹿な言語学者の誤りである！”と憤っている言語学者がいる。その怒りの余勢をかって、英語にもスペイン語にももともと主語はなかった、などとあらぬ方向にまで言及されている。

「Te amo.」はスペイン語で「君恋し」の意味である。「君を愛する」であるからたしかに主語は書かれていない、話されていないが、「amo」は動詞の一人称を表す（一人称複数われわれであれば「amamos」となる）ので、主語が無い、のではなく、この場合わざわざ言わないだけである。誰が主語かは動詞の形で分るのだから。

英語の場合は、日本の奈良平安朝の時代にあたる時期のイングランドの英語（Old English とよばれている）は、現在のイギリス人の誰もがまったく読めない古語といわれるほどの未開の言語であったのだから、そんな昔の英語を引っ張り出して、英語にも主語は無かった、などと言うのはどうも怪しげである。英語の場合はその後必死に言葉を洗練し続け、今日の姿となったのであろう。そこから明確に主語を置く文章が定着したのではないだろうか。

日本語では主語無しで語られ書かれることが多いのは事実であり、それが特徴でもある。文化としての日本語においてはそのことを良いの悪いのとあげつらっても意味が無い。それが日本語なのだから。

しかし、世界の普遍事項、共通事項を世界の人々と語る場合には、どうしても主語をおく必要がある。そうでないと理解されない。したがって、主語を置くようにとの教育は間違っていないが、しかし、明らかな誤りは、文化としての日本語の場合と世界と語る場合の日本語を区別せずに教えていることにあるだろう。何でもかんでも主語は必要だ、などと教えれば、一部の言語学者が烈火のごとく怒るのも理解できる。

技術をはじめとする自然科学の分野や政治や経済の社会科学の分野で、何とかを表現するためには、欧州の言語と同じように主語をきちんと置いた文章で書き表すことは必須の条件である。まあ、言ってみれば、そのときには「よそ行き」の日本語を使えばよいわけだ。世界の色々な土地の出身であるさまざまな人とおしゃべりするには、共通語である英語でしゃべるしか手段がない。その一歩手前で、共通語となりうる日本語でしゃべるようにすればいいだけだ。母語である日本語（文化としての日本語）を一歩離れて、意識的に共通語風の日本語でしゃべり、書けばよい。この場合の日本語には主語が必要となる。

日本語に関する言語学者の論争には、この文化としての日本語と世界の人々と語るための日本語が区別されていないので、争いはなにやら霧や藪の中に突っ込んでの怒鳴りあいの趣となってしまうている。そこからは、世界の人々と語るための日本語をどのように構築すべきかという課題への対策は何もでてこない。私のような言語に素人の者が、ここで、ああでもないこうでもないなんて発言する様になる。

(07. 02. 12. 篠原泰正)

(387) 日本文化の基底、あるいは美意識

日本文化の基底には二つの大きな核がある。一つは自然物も含めての他者と共に生きる心であり、これは哲学といえるものかもしれない。もうひとつは美学、あるいは美意識といえるものである。この美意識はまず坂東武者の「名こそ惜しけれ」という精神上的の美学に現れてきた。生きる上での規律のようなものであり、かすかに西洋で言う倫理観に近いかも知れぬ。

この美意識は精神上的のものだけでなく、「造形美」につながっていく。運慶の彫刻などがその代表である。そして、この造形への感性は次の室町時代におい

て「様式美」へと発展していく。精神の美学、造形の美学、様式の美学、この三つが合わさっての美意識こそ日本文化を鮮やかに彩る中核といえるだろう。世界に冠たるものと言っても言い過ぎではない。

戦（いくさ）においても、勝つこと以前に重要視されたのは、いかに己を美しく飾るかであり、結果よりもプロセス（いかに戦ったか）の方が大事とされた。この美学に基づく戦のやり方を変えたのは戦国時代の鉄砲の採用であろう。それ以前に、秀吉が考案した長い槍、足軽に持たせる槍の長さを相手のそれよりも大幅に長くした考えに、論理的な思考の芽生えが見られる。相手の穂先が届く前にこちらの槍が相手を串刺しにできることで、足軽たちは元気よく戦うことができた。「勇猛であれ」とかなんとか、秀吉はそのようなお説教を発することなく勇猛な足軽集団を作り上げたことになる。

鉄砲の導入も同じで、戦は勝てばよいのだから、強力な武器を使うのは当然とされた。この推進者は合理的精神のかたまりのような信長であった。

話は飛ぶが、早稲田大学ラグビー部の副将五郎丸歩（ごろうまる あゆむ）選手（佐賀工出身の天才的なフルバック）が面白い発言をしている。「型は関係ない。どんな形であれ勝てば良い。」

この発言は当たり前のように聞こえるかも知れないが、80年の歴史を持つ早稲田のラグビーの中ではかなり異色ともいえる。なぜなら、早稲田のラグビーには伝統的な型があり、それにもとづいて戦うことがいつの時代でも、暗黙の了解の如く強いられてきているからである。いかに早稲田らしく（つまり美しく）戦うかが重要視されている世界で、「らしさ」にはこだわらない、結果として勝てばいい、という発言はかなり大胆なもので、グラウンド上だけでなくこの選手の非凡さがよく出ている。

早稲田らしく戦う、という観念は、もちろんそれが勝利に一番近い方法であるとして故大西教授が編み出したものとはいえ、時代が重なっていくとその「様式美」の方が重視され、様式が行動を束縛しかねない。五郎丸選手は多分そのあたりを懸念したのであろう。

戦国時代に、せつかく、信長が率先して、どんなやり方をしてもともかく勝てばいいのだ、との論理的思考が根付いたかに見えたが、やはり美学を重視する日本人の体質に合わなかったのだろう、民族のDNAにはなりえなかった。62

年前の戦艦大和の出撃は、論理的に考えればだれが考えてもまったく意味の無い、100%勝算のないものであり、戦隊の司令官も猛反対したが、結局最終的には帝国海軍の「美」をまっとうさすものとして納得させられた。美学に基づく出撃とみれば理解できるが、論理的思考しかできない者には、永久に出撃の理由は謎であろう。

この共生の心と美意識の上に、小さくてもいいから、なんとか論理的に考え行動する2階を建築したいというのが私の望みである。そうしないと、われわれの持つ日本の知恵を世界に伝えられないからである。論理的に考え行動することは、戦国時代に経験してきていることだから、まるで日本人はできないわけではない。意識すればできることである。

世界遺産ともいえる共生の心と美意識の上に、ほんの少し「論理的」を載せることができたなら、まさに鬼に金棒となるのだが。

(07.05.22. 篠原泰正)

(390) 和魂洋才、あるいは洋才とは何か

幕末、日本が国を世界に（主に欧米に）開くにあたって、日本の精神に悪い影響が与えられることを危惧して、あるいは悪影響どころか壊れてしまうことをおそれて、「和魂洋才」というコンセプトが導入された。発案者は佐久間象山である。

このコンセプトは大変に効き目のあるもので、お蔭で精神まで「西洋」に侵されることはその後の流れの中で無かったのだが、「洋才」の方は範囲が小さくされて受け止められてきた。つまり、まず、「洋才」は限りなく「西洋の近代技術」の面にだけに限られてきた。技術に限って導入すれば、それは精神とは直接関係しない効率の世界であるから、進んでいるものはその通りと受け止め、導入することに抵抗する気持ちは生まれなかった。

さらに、これが問題なのだが、この「洋才」に含まれるもうひとつの面には、近代国家を経営する制度、言い換えれば仕組みあるいはシステムがある。この扱いは、うわべだけを、すなわち形だけを導入し、その根源にある物は深く考えることはなかった。例えば、議会制民主主義というシステムもその一つである。

なぜ近代社会システムを表す「洋才」の方は、深く考えることなく、形だけの導入にとどめたのか。それは、「和魂」に直接的に関わってくる対象だからだろう。文化のうえに乗っかっている社会システムは、極めて密接にその文化と結びついている。したがって、社会システムをその精神まで、あるいはその拠って来たところまで含めて導入することは、せっかく「和魂洋才」というコンセプトで築いた防波堤が崩れる危険が強いことになるからである。

さらに観察を続ければ、社会システムの拠って来るところを考えることは、論理的に考えることを必要としていることが分る。論理的に考えることは、「和魂」の根源である「ヤマト的なもの」を壊す危険がある。これが壊れれば、日本のあるいは日本人のアイデンティティーが分らなくなるおそれが出る。このように判断して、「洋才」が表す近代工業技術と近代社会システムの二つは、うわべだけの採用にとどめたのだろう。このことは意識してなされたのではなく、動物的直感で危険を察知しておこなわれたのかもしれない。

その結果、うわべだけ、形だけ導入された社会システムの下で展開された日本の近代の歴史は、なぜそのように展開されたのか、論理的分析がなされることなく、敗戦後、よくなかったといううわべ上の問題箇所だけを切り取り、修理された。

近代の社会システムは西洋の文化に根ざしたものではあるが、その上の論理思考の産物であり、悪しき部分の取替えや改良作業は論理的思考の結果なされるものである。これが本来のありかたであろう。しかし、日本では、そのうわべの形だけを「論理的に考える」ことなく導入してきたので、いとも簡単に悪用（改悪）されたり、西洋から言われるといとも簡単に「カイゼン」したりすることになる。日本の近代の歴史を眺めれば、その繰り返しであることが理解されるだろう。

「和魂」という大きなお餅の上に導入された「洋才」は、その中身が論理的に検討されること無く、また和魂との関わりがどのようなになるのか討議されること無く、したがっていつまでたってもうわべの形だけのものとして今日に至っている。論理的に十分に論議されてこなかった「洋才」は、1925年から45年の歴史が示すように、扱われ方一つで国を滅ぼすほどの火薬庫となりうる。感情に走らず、冷静に、150年前の開国以来導入してきた「洋才」とは一体

なんだったのか、論理的に考えることの必要性はますます高まっている。

(07.05.23. 篠原泰正)

(398) 論理性、あるいは正しさ

世界の人々に、世界の共通分野にある「もの・事・考え」を伝えようとするなら、論理的に筋道つけて説明しないと、理解を得られない。論理的であらねば、という必要性はここにある。しかし、誤解されると困るのだが、論理性と「人間としての正しさ」はイコールではない。そのことは、世界の中でもっとも論理的思考と表現に長けているとみなされている西洋社会が、この近代の200年だけ見ても、いかに人間として怪しげな行いを重ねてきたかを見れば簡単に理解されるであろう。

論理的に考え、表現する根元の所に、「人間としてのまともな心」がなければ、論理的に怪しげなシステムを考え出し、論理的にとんでもない戦略を立案し、論理的に嘘をつく行いが横行することになる。例えば、論理的頭脳の下に、金銭への際限の無い欲望が渦巻いていたり、権力へのとどまるどころのない欲望が潜んでいれば、その人の周りの人間が大きな迷惑を蒙（こおむ）ることになる。つまり、人間は、論理以前に、まともな哲学が必要なわけだ。

世界の気象異変が地球温暖化の結果であること、その温暖化は人間が作り出したものであることは、すでに「論理的に」解明されている事実であるが、それならば、温暖化の最大の元凶である欧米社会が、なぜに劇的な「論理的」対策を採らないのであろうか。論理以前のところで、何かが欠落しているからではないだろうか。「欲望という名の電車」から降りるつもりが無いためだろうか。それとも、自分たちは特別の人類であるという「非論理的」な考えを、まだ捨てないで持っているためだろうか。

さらに考えていけば、西洋の論理性そのものが、現在の地球を壊している元凶なのではあるまいか、というところにも行き着く。論理的に壊したものは、論理的には修復できないのではないか、ということに考えがさまよい出す。

何度も行きつ戻りつしながら書いてきているように、論理以前のところでの「心」のことであれば、日本文化の中で育ってきた人（国籍を問わず）の方が、これからの世界で必要であり有用であろう。つまり、東洋の心を維持しながら

西洋のやり方をまねしてきた長い経験を持つのは日本社会しか世界に存在しないからである。

われわれは、共生の心と精神美、造形美、様式美を土台にして、そこに西洋の技術を混合することで、優秀な「形あるモノ」を作り上げてきた。そのことは日本の近代150年の歴史が明らかに示しているところである。しかし、その「モノづくり」は、基本的には「職人的」なものであり、世界という舞台上の位置を考え、また、過去・現在・未来という時間軸の中の位置を考えながらなされてきたものではない。

考えが袋小路に入りそうだからやめよう。

論理的思考と表現能力を身につけることは、人間としての品質が向上することを意味しない。しかし、世界の中で、それなりの役割を果たすためには、「面倒だけれど」身につける必要がある能力ということになるだろう。東洋の片隅の島の中で、世界を害せず、世界からも害されずにひっそりと生きていくだけなら、論理性などは必要ない。伝統の中で培ってきた「美学」だけで十分である。

しかし、開国以来われわれはすでに多くの害を世界に与えて来た、良きことも数多くなしてきたと思われるが、いずれにせよ、世界の中に住民登録をこの150年してきているのだから、住民として世界村にそれなりのお役立ちをせざるを得ない。人間としてまともな「心」の上に、「論理性」を被せることで、お役立ちする土台は出来上がる。

カラスを白鷺と言いくるめる「論理力」までは必要ないが、やはり、論理的に考え、論理的に表現できるように訓練を続けることは必要なのだ。その訓練をすることで、今度は逆の方向から、日本の「美学」の価値が、世界の中におけるその有用性が、自分でも認識でき、少しずつ世界に伝えていくことができるようになるのではないだろうか。

その論理訓練を行わないで、日本式精神やら美学を生のまままで声高にしゃべることは、あるいはさらにずうずうしく、周りの人に押し付けようとすることは、世界の人々にとって、傍（はた）迷惑であるだけでなく、まったく理解できない「奇妙」な言動としてしか映らないであろう。このことは、1925年から45年の20年間の歴史の中に、すでに実施例として記録されているところで

ある。

(07.06.02. 篠原泰正)

(404) 歴史、あるいは論理的思考

日本文化の核を構成する観念の一つに「今現在」があるとみれば、歴史を眺める場合も「今」と過去の感性の交流であり、歴史事実を客観的に眺めて分析する姿勢ではない。今在る自分と歴史事項との交流は、当然のことながら主観あるいは感性に基づく理解、あるいは取捨選択につながり、歴史物語による感性の動きが大事なこととなる。

日本人は、対象物を客観的に眺め分析するのではなく、対象物との魂の交流という相互関係を重視するだけでなく、過去の出来事に対しても、同じように、観察・分析ではなく、感性を動かすものとして捉えていることになる。義経の物語や忠臣蔵が今でも人々の心に訴えるものがあるのは、そこに「魂の交流」が成立しているからであろう。

歴史事項を客観的に眺め分析するやり方は、したがって、幕末以降に輸入され頭で理解されてきたものであり、日本人全般に定着したものの観方になっているかといえば、はなはだ心もとない状況である。

論理的思考とは、事実の把握を出発点とするから、そして今生じていることは過去に生じた何らかの結果であるから、過去を知らずして状況把握は行えず、当然、分析も行えない。分析ができなければ問題点も出てこなく、問題点が見つけられなければ、対策も考えられない。あるいは考える必要はない。

このように、日本文化で育った日本人にとって、西洋的な歴史把握は本来的には異質のものであり、頭でもって意識的に学ぼうとする強い意欲がなければ、歴史把握とその分析は、ぼいと捨ててしまうことも多いだろう。

したがって、歴史を学ぶ重要性は明白には認識されておらず、学校の必修教科から消えてしまっても、ほとんどの人が不思議に思わないことになるのだろう。意図的にこの教科を消し去ろうとしている人々にはまことに好都合な反応となる。

西洋世界が何かの施策を打ち出したり、それを実行するためのシステムを提案してくる時には、その裏に必ず歴史の積み重ねに基づく理由がある。その提案を検討するためには、したがって、その裏を探らなければならない。歴史を眺め分析するやり方が身につけていないと、うわべだけの言葉に「イエス・サー」というか、感情的に反発するか、の両極端しかでてこない。まことにガキっぽい反応しか示せないことになる。

現在の日本は、その社会のさまざまな面で、何が問題か抽出できず、従って対策を考えられずの状態が現れており、さらに、それ以上に、分析して問題を抽出する必要性を理解せず、したがって対策を講じる必要性もまったく感じないでいる有様がそこら中に見かけられる。

1925年からの20年間、日本の知性（インテリジェンス力と論理思考力）は地に墮ちた。今、1985年以降、60年周期で再び「知性の貧困」の時代が始まり続いており、日々その病状は深刻化している。

（07.06.11. 篠原泰正）

(425) 論理、あるいはその表現

その中に文化や階級を異にする構成員が含まれている場合、その集団をまとめるには「宗教」がもっとも有効であろう。しかし、一つの集団が信仰、あるいは宗教的情熱でまとまっているとしても、その集団をうまく経営できる保証は無い。

このように文化や階級を異にする構成員が含まれている集団を「経営」する、あるいは「コントロール」するためには、そこに「論理的」な説明が必要となる。”問題がここにあり、それを解決するためにはこのようにしなければならない、そのためにはこのような努力が必要である”、などなどを説得し理解を求めするためには、論理的に筋道を立てなければならない。多分、これが、異種混合の集団を経営するうえでの唯一の方法であろう。

その論理的説明には「言語」という道具が必要となる。西洋世界が500年の長きに渡って世界をコントロールできた要因の一つに、この言語、欧州言語の存在を挙げることができるだろう。欧州言語は、論理的なラテン語のおかげを十分に受けており、このことは、直系ではないゲルマン系言語、英語やドイツ

語もラテン語の影響を大きく受けているということでは同じである。

この論理的な、構造的な言語を持っている強さでもって、西洋世界は、自国内の経営だけでなく、西洋世界内の他国との争い（言語による戦争、すなわち外交）を経営する場合も、植民地を経営する場合も、うまく収めてくることができた。

植民地の経営においては、通常のやり方は、その地域（自国の領土内）土着の住民の中からほんの一握りの「エリート」を自分たちの言語（ポルトガル、スペイン、フランス、イギリス、ドイツ語など）で教育し、植民地経営を補佐させるものであった。植民地から独立した諸国が、今でも元の宗主国の言語を公用語（のひとつ）としていることから、その言語による浸透力が高かったことが分かる。例えば、アフリカでは、元の仏領赤道アフリカ（French Equatorial Africa）に属していたカメルーン（Cameroon）、ガボン（Gabon）及びコンゴブラザビル（Congo-Brazzaville）ではフランス語であり、その南のアンゴラ（Angola）ではポルトガル語という具合になる。

これらの欧州言語の中でも、英語がこの200年の間にぬきんでて、この20年ほどでまったくの世界共通語の地位を占めるようになった。すなわち世界の経営に関わる国連で、国と国の間の外交で、そしてグローバル企業の経営において、全ては英語をベースにして運営されている。

このナンバーワン言語の位置を英語が占めることができたのは、19世紀における大英帝国の政治経済軍事における優勢、20世紀におけるUSAの政治経済軍事における優勢の結果であることはいままでもないが、言語そのものが他の欧州言語と比べて構造や時制や人称が「単純」であるということが大いにその力となったと言えるのでは無いただろうか。フランス語やスペイン語のように、変に洗練されていなかったことが幸いして、普及にあずかった。つまり外国語として学習するのに適した言語と言える。

さらに、英国の自国内経営や植民地経営が、他の、特にラテン系諸国のそれと比べて、筋道のたった明快性をもっていたこと、それらが英語で表現されてきたことが、今日のチャンピオンの座を確立する要因でもあったろう。このことはもちろん、内外の経営がすばらしかったことを意味するものではないが、とにかく国内・国外（植民地）においてハチャメチャ経営が特徴であったラテン系諸国とは大きく異なる特徴であった。

ともあれ、自分たちの文化とは大きく異なる文化の下で生きてきた世界の人々にこちらの考えを述べ、何とか合意を得ようとするならば、論理的に筋道立てて、明快に表現するしかないことは明らかであり、その際、その「説得」に長けた英語のやり方を勉強することは、必須の訓練項目と言えるだろう。

(07.06.28. 篠原泰正)

(478) 北辰一刀流道場:ロジカルであることの利点(1)

幕末、千葉周作が創業し経営した北辰一刀流の「千葉道場」では、竹刀の叩きあいの剣術を論理的に教えることでたいへんな人気であったという。他の道場では5年掛かるところを千葉では2年で済むと評判になり、押すな押すなの繁盛であったという。

それまで気合とひたすらの肉体の鍛錬であったような剣術が、千葉周作のおかげで初めて論理的に組み立てられたことになる。人は誰でも、学ぶものが何であれ、効率的に学びたいのは当然だから、短期間で剣術が強くなる可能性があれば、そこにひきつけられるのは当たり前であろう。

千葉道場では、初心者は竹刀の握り方から教えられ、なぜそのように握るのがいいのかを分かりやすく説明してくれたという。この誰でもわかるように教えるというところが、論理的に教えるということとほぼ同じ意味になるのではないだろうか。

学ぶ対象を剣術（剣道）から外国語（英語）に飛ばす。

言語というものは、文化の産物でもあるから、なぜそのような表現の仕方をするのかなどなど、論理的に説明のつかないことがたくさんある。それだから面白いし奥行きも深い。しかし一方で、ものや事がらや心の在り様を表現する上で、一つの言語は基本的な法則を持っていることも事実であろう。

従って、例えば英語を外国語として効率よく学ぶためには、この基本法則を理解することが一番効果があることになる。英語ではなぜこのような表現方法を採用しているのか、その解説付きで教えてもらえれば、学習の速度は千葉道場並になると思われる。特に頭が論理的思考に出来上がっている人には、「なぜ」

そうになっているのかを説明するのがもっとも効果的である。

さらに、論理的に言語を分解し、なぜそうなのかを理解していく材料としては、表現の対象を論理的に展開されているものに絞ることも重要である。それらの対象とは、文化に影響されずにある、世界の普遍（共通）事項、自然科学・技術と近代社会の基本構造（いわゆる社会科学の分野）が当てはまる。その一方で、文化と深く関わっている文学の世界は、なぜそうなのか、ということが論理的に説明できない世界であるから、学習の対象、少なくとも一定レベルに達するまでは避けるべきである。

外国語の学習方法には二通りある。一つは母語を修得していく過程と同じで、「なぜ」は脇に置いておいて、ひたすら身体で覚えていくやり方である。論理的説明無しで、毎日道場に通りひたすら竹刀を振り回して身体で覚えていくやり方と同じである。生まれたときから少しずつ母なる言葉を覚えていった記憶を思い出せば、このやり方には膨大な修練の時間が必要であることは容易に理解されるだろう。言語に特殊な才能を持った人以外には奨められないやり方である。

もう一つが、冒頭から書いてきた、論理的展開されている物・事を対象として、それらについてどのように論理的に表現されているかを見ながら、なぜそのような仕方で表現するのかを考えながら学習していく方法である。

英語やその他の欧州言語と日本語は構造がまったく異なるので、日本人がそれらの欧州言語を学習するには、構造を論理的に理解して学ぶ方式がどうしても必要である。

もちろん、剣道においても、頭で理解しただけでは、実戦の場でとても新撰組の土方歳三や沖田総司には対抗できないから、毎日竹刀を振り回して身体で覚える訓練も必要であり、これは英語などの外国語学習でも同じである。

ポイントは、素振りを何百回も毎日するにせよ、頭での理解があるかないかで学習の効率は大きく異なるということだ。

英語をはじめ、欧州言語（私が知っているラテン系とゲルマン系だけに対象を限るが）は極めて構造的言語であるから、論理的に学習する対象としてはたいへんに適している。その中でも、英語は、世界の共通事項を語る上で、実質的

に唯一の共通言語の位置を占めているから、学習の材料はいくらでもある。

日本の学校での英語教育は、ここまで述べてきたようなことが何一つ考慮されていなく、学習の方法論不在の上で、ただ闇雲に生徒を教室に閉じ込めて竹刀を振り回すことだけを強制しているように見受けられる。これでは道場（教室）から逃げ出したいくてたまらない生徒が増えるのも当然だろう。増えるどころか、10人中9人までは脱走願望者が現実ではないか。

しかも、付け足しでいえば、日本の義務教育プラス高校での英語教育は、「なぜ英語を学ぶ必要があるのか」その哲学不在のままこの60年行われて来ているという、恐ろしいほどの痴呆性あるいは無責任の下にある。

（07.08.24. 篠原泰正）

（517）パワーポイントを禁止せよ

もう10年以上前のことだが、シリコンバレーにある会社のCEOが、パワーポイント使用禁止令を社内に出した、という、どこまで本当か嘘か分からないが、話を聞いたことがある。その禁止令の理由は、事業部長の誰もがパワーポイントを使って「美しい」プレゼンばかりをするものだから、大いに怒ったところにあるという。ビジネスはそんなに美しく、うまく進むわけがなく、これでは事業の実体がまったく見えない、というわけだ。CEOの怒りは理解できる。

パワーポイント（このアプリケーションの元祖は1987年発表のロータス社（Lotus）のFreelance Graphics—元は1986年に買収したGCI: Graphics Communications Inc.が開発したソフトであり、このMS（Microsoft）の製品は後攻めながら市場を支配した）の弊害は、しかし、日本においてもっと大きい。グラフィック感覚に長けているけれど、文章による表現力はトンとお粗末な日本人にとっては、図形が簡単に作れ、写真などの画像も取り込み放題のこの有能ソフトプログラムはありがたい。つまり図形で示せば、おおよそのところが理解され、文章でくたくだ説明する手間が省ける。言葉も単語の羅列またはフレーズ（句）だけで済むので「文章」を考える努力も要らない。

出すほうと受ける方がおおよその理解で納得する日本社会においては、まことにうってつけのプログラムなのだ。おかげで、ビジネスマンの文章力は、ただでさえ貧しいのに、ますます程度が落ちていくばかりである。お役所や独立何

とか法人というところがウェブ上で公開しているレポートもこの「パワポ」(O Lはこう呼ぶ)で作られた図形や写真ばかりが溢れている。おかげでダウンロードしようとしてもファイルがめったやたら重く、私のPCのPDFがじっとして動かない場合が多い。文章が書けないから、あるいは文章ではっきり述べると後がやばそうだから、図形で逃げているわけだ。

戦後の日本は欧米の先進の製品をお手本にして、また品質保証のシステムはアメリカのデミング博士 (Edwards Deming) に教えてもらって、世界の5本の指(あるいは3本の指?)まで上り詰めた。私もそのワッセワッセ組の一人であった。一方で、その磨き上げた技術を「語る」技能はまったく省みられることがなかった。私は幸い、仕様書の制作にうるさい上司(複数)の下で鍛えられたから、少しは部下にうるさく接したけれど、そのような面倒な指導が評価される雰囲気は社内になくなっていったので、あるときから放棄してしまった。大いに反省すべき行いであった。

そこに「パワポ」の出現である。われわれ日本人は優秀な製品は作るけれど、重度の言語障害を持つ民族として、世界の中でも特異な存在であり、その症状はますます悪くなる一方である。

話は飛ぶが、先日あるところで、”日本ではTLO(技術移転)は無理でござんすよ”、と話したら、”いや、特許を分かりやすくプレゼン(パワポを使って作成するのだろう)することが行われているから、TLOも成り立つ”、とのご高説に接した。アホも休み休み言えというものだ。どこの世界に、特許仕様書(明細書)が読めないからといって(何が書いてあるのかよく分からないことを読めないと言っている。文盲という意味ではない)パワポで解説する手間を介在させている国がある。

こんなことが外国に知られたら、”日本人はアホかいな”、とまたまた笑われることになる。パワポでのプレゼンを受けて、”うん、明細書には何が書かれているのか、どこが特許かよく分からないけれど、図式で示してもらって、なんとなく価値ありそうなので、一つライセンスを受けるか”、なんて考える社長が世の中に居るわけが無い。もしそんな社長が居れば、その会社の明日は無い。

文章で表現する能力が低いということは、他人の文章のひどさ加減もよく分からないことに直接つながっている。世界に向かって、俺の発明技術はこれだ、

私の考えはこうだ、化学肥料をあまり使わず農作物を育てる方法はこうだ、などなど、大きな声で語らなければならない今、そして明日の日本で、重症の言語障害を克服する策は、まず「パワポ」の使用禁止令を国中に発動することだろう。（07. 11. 20. 篠原泰正）